



宗教と精神医学のあいだ

大宮司 信 著
日本評論社
2022年3月 160頁
本体価格 3,400円＋税

日ごろ臨床に精を出しておられる諸兄姉は、宗教の有する大きな力に驚いた経験をおもちではないだろうか。それがまた、われわれにとって好都合なときも不都合な折もあり、医療とは別次元の価値観がひしひしと体感されたことであろう。

さて、大宮司氏は精神病理学の大家であり、こうした宗教と臨床精神医学の間柄につき多くの論考を残している。本書には1994年から2021年までの論文がまとめられ、より専門的な著作もあるなかで、一般の本学会員にも読みやすい内容となっている。

まずは開いてみよう。氏の言葉どおり、宗教と医療は人間の苦悩という同じ起源のもとに立つとはいえ、根元から分岐した木の枝葉が再びつながらないように、別々の道を歩んだ（「宗教と精神医学の関係」序章）。よって、ひとりの人間のなかで並立が難しいかわら、宗教のもつ精神保健上のポジティブな側面（「宗教と精神保健」第1章）が注目され、精神科医療が病院主体の旧態から広がりを見せるなかで双方は接近しつつある。

たしかに「やまい」と「いやし」（「心の病気と宗教の癒し」第2章）の言葉に表象されるように、救いをもたらす者が病的（ないし修行による意図的）な状態を経ることで、やみ苦しむ者から信頼と共感を得るのはピアサポートに照応されようし、われわれは統合失調症者の幻聴や病的体験がある面で彼（女）らの安全装置になっていることや、憑依あるいはシャーマニズムと精神障害との間の近しさを知っている（異論もある）。「大学生と宗教」（第3章）においては、問題点を挙げるばかりでなく、健全な形での宗教活動が鏡の裏表と説かれる。この妥当さは、教義を超

えたスピリチュアルケアや臨床宗教師といった学術・実践上の展開により立証されている。ここまでのいわば、本書の総論であるといえよう。

とはいえ、隣り合う枝葉が交わるからといって、やはり宗教と医療の間に距離はある。それが各論である。宗教として「オウム真理教事件」後の諸問題（第4章）や「阿闍世コンプレックス」（第7章）、医療として「非定型精神病」（第5章）や「うつ病」など（第8章）から「ロボトミー」（第6章）までが縦横に語られる。「宗教は結果として病気の治癒…をもたらすものの、当初からそれを目的とはしていない」（非定型精神病）、「宗教の持つ働きは…批判的見解を含めた医療世界外部からの声」（ロボトミー）、「阿闍世物語が仏典のそれとは大幅に異なっている」（阿闍世コンプレックス）など、「そうだよな〜」とか「そうだったか!」とか、読み手は随所で膝を打つであろう。これらの章は、各自の興味に応じて順不同に読み進められる。

そして終盤の2つの章で死のテーマが取り上げられる。われわれにとって緩和ケア診療のもと関与が求められる、死の臨床こそ締めくくりにふさわしい。ここでは「病気の終局の死」に対して、生の対照（「well dying」第9章）と、「死の前形式」たる病気の過程（「カール・バルトの病氣論」第10章）に焦点が当てられる。死の間際における和解の大切さ、感謝（や謝罪）の意味はよくわかる（第9章）し、「生かされている」という受動態（第10章）は、——うまく表せないが——より能動態たる医療の甲斐なきいまわの場で、われわれの前に急に立ち現れる（ように見える：それまで見えて（見て）いなかった）のではないだろうか。医療の後退から浮き出る宗教（のようなもの）にとどまらず、宗教がそれ自体存在することは論を俟たない。

ここまで近いといい、距離があるともいった。宗教家と医療者は、時間縦断的には補完し合う（近い）としても、時間横断的には代替関係にある（距離がある）と思われる。そうした宗教と医療の間柄を、本書は、宗教上の予備知識が十全でない者にも納得へと後押ししてくれる。ご一読をお勧めしたい。最後に、ひとりの人間のなかで並立が難しいともいった。われわれのなかにある宗教（広い意味での宗教観）には、医療の場でいかに向き合えばいいだろうか。ぜひ氏に教えを請いたいものである。

（大西次郎）